1歳6ヵ月児の父親の労働時間・育児参加時間からみた母親の育児幸福感

澤田あずさ[1)]，明野　聖子[2)]，吉森　友香[3)]，工藤　禎子[2)]

1)　帯広市健康推進課
2)　北海道医療大学看護福祉学部看護学科
3)　北海道医療大学大学院看護福祉学研究科修士課程

要　旨

母親の肯定的な感情を支持する支援のための基礎資料を得ることをねらいに，1歳6ヵ月児の父親の労働時間・育児参加時間からみた母親の育児幸福感を明らかにすることを目的とした．対象は1歳6ヵ月児健診を受診した母親である．健診時に，説明と同意のうえ，母親の育児幸福感（清水ら，2006）と父親の労働時間・育児参加時間に関するアンケートを配布し，郵送法で回収した．全122人に配布し，59件の有効回答を得た．分析は単純集計の後，両親・子ども・父親の労働時間などの各変数ごとに母親の育児幸福感尺度の平均点を算出した．その結果，父親の帰宅時間は20～21時が42.4%であった．父親の週の労働時間は平均59.2±15.0時間であり，50時間以下が33.9%であった．父親の育児参加時間は，平日は1～2時間が40.7%と多く，ほとんどなしが全体の4分の1を占め，休日は半日ぐらいが55.9%と多かった．父親に子どもを任せて母親が外出できる時間は，ほとんどなしが54.2%であった．両親・子ども・家族の特性別及び父親の労働時間・帰宅時間・育児参加時間別にみた母親の育児幸福感得点に有意な差はみられなかった．父親に任せて母親が1人で外出できる時間において，「ほとんどなし」または「半日以上」の場合に母親の育児幸福感は高く，「1～2時間」の場合に育児幸福感は低く，有意な差がみられた．

キーワード

育児幸福感，父親，労働時間，育児

Ⅰ．はじめに

わが国では，核家族化や女性の社会進出，および家庭や地域社会の変化による育児にまつわる負担の増大が少子化を進行させているといわれている．21世紀成年者縦断調査（平成16年）によると，父親である夫の家事・育児時間が少ない夫婦の方が出産割合が低いことや，夫の1日当たりの仕事時間が多い夫婦の出産割合が低いということが明らかにされている[1)]．わが国の2001年の「社会生活基本調査」では，5歳未満の子がいる男性の家事・育児時間の平均は1日0.4時間であり，出生率とともに世界的に最低の水準である[2)]．労働力調査（平成18年）によると，30歳代男性の労働時間は週60時間以上のものが多く[3)]，わが国の父親達は育児に参加したい気持ちはあっても，長時間労働により育児・家事にかけられる時間は限られ，母親が専業主婦の場合も働いている場合も負担が大きいといえる．平成15年には，少子化社会対策推進法，次世代育成支援対策推進法が成立し，子育てに伴う喜びが実感される社会をめざすことや，両親が共に育児に関わる社会的な合意と仕組みづくりのため，行政や地域社会のみならず事業主に対する雇用環境の整備が責務として明示された[4)]．また，父親，母親共に，ワーク・ライフ・バランスを保ち，家庭や子育てにも時間をかけられるゆとりを持つことの重要性が唱われるようになり[5)]，今後はこれらの施策の進捗と効果を明らかにしていくことが必要であろう．

また，近年，虐待予防の面から，母親の育児不安やストレスに焦点を当てた研究が報告されている．清水ら[6)]によると育児とストレスは，焦燥感や怒り，疲労感や空虚感などのネガティブな感情に注目すべきであるとし，三国[7)]は養育者の心の健康状態は子どもの成長発達に影響を及ぼすと述べ，親の育児ストレスに配慮した支援は必要であるとしている．子どもの成長・発達に伴い，親が感じる育児ストレスも変化するといわれており，子どもが1歳6ヵ月の頃に母親は最も育児ストレスを感じやすいという[8)]．これは1歳6ヵ月児には「活発になり，目が離せなくなる」「自立心や反抗心の芽生え」といった発達上の特徴があり，村上ら[9)]が述べているような「子どもに対するコントロール不可能感」を母親は感じるためと考えられる．育児

＜連絡先＞
明野　聖子
石狩郡当別町金沢1757
北海道医療大学　看護福祉学部
看護学科　地域保健看護学講座

ストレスの軽減に関して，白川ら[10]は「ソーシャルサポートが，子育てをする母親の適応を促進し，養育行動やその情緒的側面を援助し，母親の育児負担感を軽くして，育児ストレスを軽減させる」と述べ，ソーシャルサポートの中でも夫からのサポートが重要であるとしている．

また，近年，母親のポジティブな感情に焦点をあてた報告もみられ，清水ら[11]は「育児中に感じる肯定的な情動」を育児幸福感と定義し，尺度開発を行っている．母親の育児ストレスと育児幸福感とでは，育児ストレスの「夫の育児サポート」と育児幸福感の「夫への感謝の念」との間にのみ，有意な負の相関がみられたが，強い相関はなく，育児ストレスは直接的には母親の育児幸福感には影響しないと述べている[11]．

このように，育児ストレスについては，子どもの成長・発達の段階によって変化がみられることや，核家族や第一子といった家族特性が関連していることが明らかとなっているが，育児幸福感については家族の特性との関連が明らかになっていない．父親の帰宅時間が20時以前のほうが父親が育児や家事を実施していること[12]や父親の帰宅時間が遅いほど母親の育児不安が高い[13]という報告がみられ，父親によるサポートは，母親の育児幸福感や育児ストレスなどの感情に関連する重要な要因と考えられる．しかし，労働時間の長い父親達が育児にどの位関わっているか，また，父親が育児に参加することが母親のポジティブな感情を高めているかについて十分に明らかにされているとはいえない．

そこで，本研究では，育児幸福感というプラスの視点からの育児支援を検討するための基礎資料を得ることをねらいに，1歳6ヵ月児の母親の育児幸福感と，家族特性，父親の労働時間・育児参加時間との関連を明らかにすることを目的とした．

Ⅱ．研究方法

1．対象者

北海道内の地方都市A市（人口約13万人）で2007年9～10月（全4回）に実施された1歳6ヵ月児健診を受診した母親を対象とした．なお，対象者を1歳6ヵ月児の母親としたのは，三国ら[8]の研究において育児ストレスが高いとされているためである．

2．調査方法

健診受付後の母親全員に個別に声をかけ，承諾を得られた母親にアンケート用紙（A4全5枚）および封筒を配布した．母親以外が受診している場合は，母親に記入してほしい旨を伝え，協力を依頼した．健診中の児の安全面への配慮から，アンケートへの記入は原則として自宅で行ってもらうこととし郵送法にて回収を行った．なお，締め切りは各健診日後1週間と設定した．

3．調査内容

1）対象者の属性および，父親の労働時間・育児参加時間

母親の年齢・就業状況，父親の年齢，家族構成，子どもの人数，受診児の出生順位・性別，育児を行う上で最もサポートを受けていると感じる人について回答を求めた．また，父親の就業状況，帰宅時間，週の労働時間，育児参加状況（平日・休日），父親に子どもを任せて母親が外出できる時間をたずねた．

2）育児幸福感

清水ら[11]による，育児幸福感尺度　8因子41項目のうち，1歳6ヵ月児の発達段階を踏まえ，適切ではないと考えられる2項目（「どんなに叱っても，お母さん大好きと1日に何回も言ってくれ，子育てをしていても唯一安心する」「いくら叱っても，お母さん大好きと言ってくれると安心する」）を除いた39項目に対し，5段階評価（「あてはまる」を5点，「少しあてはまる」を4点，「どちらでもない」を3点，「あまりあてはまらない」を2点，「あてはまらない」を1点）による回答を求めた．なお，得点の高い方が，育児幸福感が高いということになる．

4．分析方法

各項目を単純集計した．統計ソフトSPSSを用い，各項目の単純集計および対象者の属性・父親の労働時間・育児参加時間別に，育児幸福感尺度の平均得点を求め，差の検定を行った．父親の帰宅時間，労働時間は，度数分布と記述統計を確認した上で，3カテゴリーに分けた．

5．倫理的配慮

事前にA市の健診担当者に研究計画書を基に調査趣旨を説明，母親への協力依頼文およびアンケート用紙の内容を協議し，了承を得た．また，調査が健診の進行の妨げとならないよう，母親へのアプローチの仕方なども事前に打ち合わせを行った．

対象者に対しては，調査の目的・方法，調査への協力は自由であること，無記名アンケートであること，個人情報の厳守について明記した協力依頼文を用いながら口頭で説明を行い，調査に協力すると意思表示した方にアンケート用紙および封筒を配布した．

Ⅲ．結　果

全4回で122名に配布したところ，アンケート用紙は63部回収でき，回収率は51.6%となった．そのうち，ひとり親の母親からの回答4部は対象外としたため，有効回答は59部，有効回収率は48.3%であった．

1）対象者の属性（表1）

母親の年齢は30～34歳が25人（42.4%），35～39歳が17人（28.8%）と30歳代が多かった．主婦が48人（81.4%）を占め，正職員は4人（6.8%），パート職員は5人（8.5%）であった．父親の年齢においても30～34歳，35～39歳が多かった．父親は正職員が51人（86.4%），自営業は6人（10.2%）であった．子どもの数は平均すると約2人（1～4人）であり，1人が21人（35.6%），2人が23人（39%），3人以上15人（25.4%）であった．健診受診児は第2子以降が34人（57.6%）と多く，性別は男24人（40.7%），女35人（59.3%）であった．

また，家族構成は核家族が57人（96.6%）であった．一番の育児協力者は，父親が32人（54.2%）と多く，次いで，母親側の親が19人（32.2%）であった．

父親の帰宅時間は20～21時が25人（42.4%）と多かったが，22時以降も13人（22.0%）みられた．週の労働時間は平均59.2±15.0（最小30～最大120）とばらつきが大きく，50時間以下が20人（33.9%），51～65時間が15人（25.4%）であり，66時間以上も17人（28.8%），無記入が7人（11.9%）みられた．父親の育児参加時間は，平日は1～2時間が24人（40.7%）と多かったが，ほとんどなしが15人（25.4%）と全体の4分の1を占めていた．休日においては半日ぐらいが33人（55.9%）と多かった．また，父親に子どもを任せて母親が外出できる時間については，ほとんどなしが32人（54.2%）と最も多く，1～2時間が12人（20.3%），半日ぐらい13人（22%），ほぼ一日中2人（3.4%）であった．

2）育児幸福感（表2）

育児幸福感8因子39項目の得点は，最高値は195点，最低値は148点，平均値±標準偏差は180.07±10.78点となり，高得点側に分布が偏り，左に尾を引くような分布が見られた．

それぞれの項目に対する分布は表2に示した．第1因子である「子どもの成長」に関する6項目はすべて，9割以上が「あてはまる」という回答であった．また，第5因子である「夫への感謝の念」に関する5項目においては，他の因子と比べ，度数にばらつきが見られた．各因子の特徴は次の通りである．

第1因子「子どもの成長（項目1～6）」においては，「子どもの笑顔や寝顔，しぐさなどをみて喜びを感じる」や「大病もせず丈夫に育ってくれていることに感謝する」という項目で59人すべての対象者が「あてはまる」と回答するなど，「あてはまる」を選択する割合がすべての項目で9割以上と非常に高かった．

第2因子「希望と生きがい（項目7～14）」では，「子どもそのものが希望である」という項目のみ，「あてはまる」が28人（47.5%）と半数以下であり，「どちらでもない」についても11人（18.6%）と多かった．

第3因子「親としての成長（項目15～21）」においては，「子どもに生きる勇気をもらっている」という項目で，「どちらでもない」が5人（8.5%），「あまりあてはまらない」が2人（3.4%）という回答が他の項目よりも比較的多く見られた．

第4因子「子どもに必要とされること（項目22～24）」においては，「叱った後に，かわいそうなことをしたなと思い，その後むしろ愛情を感じる」という項目で回答にばらつきがみられ，「あてはまる」は31人（52.5%），「少しあてはまる」が15人（25.4%），「どちらでもない」が10人（16.9%）であった．

第5因子「夫への感謝への念（項目25～29）」においては，各項目とも回答にばらつきがみられた．特に，「夫が疲れて帰ってきても，今日の子どもの様子を尋ねたり，話に耳を傾けてくれることに感謝している」という項目では，「あてはまる」は25人（42.4%）であったが，「どちらでもない」が7人（11.9%），「あまりあてはまらない」が5人（8.5%）であった．また，「夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる」という項目については，「あてはまる」が22人（37.3%）であったが，「どちらでもない」も19人（32.2%）であった．

第6因子「新たな人間関係（項目30～33）」においては，「子育てをすることによって人との輪が増え，自分の居場所ができた」という項目で，「少しあてはまる」が20人（33.9%）で最も多く，「どちらでもない」も18人（30.5%）と多かった．

第7因子「子どもからの感謝や癒し（項目34～36）」，および第8因子「出産や子育ての意義（項目37～39）」においては，ほとんどの項目においてあてはまるが7割近くであった．

3）基本属性別にみた母親の育児幸福感（表3）

両親の特性では，母親の年齢が若いほど育児幸福感が高かった．特に，20～29歳以下で育児幸福感が平均186.25点であり，30歳以上の178点台より高かった．母親の職業別にみると，なしの場合179.98点，ありの場合180.45点であった．父親の年齢は，29歳以下が182.70点であり，30歳以上の179点台よりもやや高かった．父親の職業は正社員では180.41点，その他では177.88点であった．両親の特性別の育児幸福感には有意な差はみられなかった．

子どもの特性別では，子どもの人数が1人の場合181.81点であり，2人以上の場合よりやや高かった．出生順位は第1子の場合182.40点であり，第2子以上の場合の178点台よりやや高かった．家族形態では核家族が179.72点であり，拡大家族は190点と高かった．子ども・家族形態の特性別には育児幸福感に有意な差はみられなかった．

一番の育児協力者が父親の場合が182.63点，母親

表1　対象者の基本属性

			計 n=59
両親の特性	母親の年齢	20～24	1(1.7)
		25～29	11(18.6)
		30～34	25(42.4)
		35～39	17(28.8)
		40～	5(8.5)
	母親の職業	主婦	48(81.4)
		正職員	4(6.8)
		パート	5(8.5)
		自営業	1(1.7)
		その他	1(1.7)
	父親の年齢	～19	1(1.7)
		20～24	1(1.7)
		25～29	8(13.6)
		30～34	19(32.2)
		35～39	20(33.9)
		40～	10(16.9)
	父親の職業	正職員	51(86.4)
		パート	1(1.7)
		自営業	6(10.2)
		その他	1(1.7)
子どもの特性	人数	1人	21(35.6)
		2人	23(39.0)
		3人	12(20.3)
		4人	3(5.1)
	受診児の出生順位	第1子	25(42.4)
		第2子	19(32.2)
		第3・4子	15(25.4)
	性別	男	24(40.7)
		女	35(59.3)
家族形態		核家族	57(96.6)
		拡大家族(父方)	1(1.7)
		(母方)	1(1.7)
一番の育児協力者		父親	32(54.2)
		母親側の親	19(32.2)
		母親側の兄弟	2(3.4)
		父親側の親	2(3.4)
		友人	2(3.4)
		その他	2(3.4)
父親の帰宅時間		～19時	18(30.5)
		20～21時	25(42.4)
		22時～	13(22.0)
		無記入	3(5.1)
父親の労働時間（週）		～50時間	20(33.9)
		51～65時間	15(25.4)
		66時間～	17(28.8)
		無記入	7(11.9)
父親の育児参加時間	平日	ほとんどなし	15(25.4)
		30分ぐらい	15(25.4)
		1～2時間	24(40.7)
		半日ぐらい	3(5.1)
		その他	2(3.4)
	休日	ほとんどなし	2(3.4)
		30分ぐらい	4(6.8)
		1～2時間	10(16.9)
		半日ぐらい	33(55.9)
		ほぼ一日中	10(16.9)
父親に任せて母親が外出できる時間（週）		ほとんどなし	32(54.2)
		1～2時間	12(20.3)
		半日ぐらい	13(22.0)
		ほぼ一日中	2(3.4)

表2　母親の育児幸福感

因子	項目	あてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	あてはまる
1. 子どもの成長	1) 子どもが元気に成長しているときに安心する	−	2(3.4)	−	−	57(96.6)
	2) 子どもの笑顔や寝顔、しぐさなどをみて喜びを感じる	−	−	−	−	59(100.0)
	3) 子どもの一生懸命な姿に愛情を感じる	−	−	−	1(1.7)	58(98.3)
	4) 子どものできることが増えて嬉しい	−	−	−	5(8.5)	54(91.5)
	5) 大病もせず丈夫に育ってくれていることに感謝する	−	−	−	−	59(100.0)
	6) 子どもをほめたり抱きしめたりするととても喜ぶ	−	−	−	3(5.1)	56(94.9)
2. 希望と生きがい	7) 子どもと一緒にいるだけで幸せだ	−	−	2(3.4)	18(30.5)	39(66.1)
	8) 子どもが生まれてきてそこにいること自体が喜びだ	−	−	−	9(15.3)	50(84.7)
	9) 叱るときもあるがいつもかわいいと思う	−	−	1(1.7)	11(18.6)	47(79.7)
	10)子どもに抱きついてにおいをかいでいると気持ちが落ち着くし、子どもといるだけで安心だ	−	−	5(8.5)	11(18.6)	43(72.9)
	11)子どもがいるから頑張ろうという気持ちになる	−	−	1(1.7)	8(13.6)	50(84.7)
	12)子どもそのものが希望である	−	1(1.7)	11(18.6)	19(32.2)	28(47.5)
	13)生まれてきてくれたことにありがとうを子どもに言いたい	−	−	−	5(8.5)	54(91.5)
	14)子どもを思う気持ちは誰よりも負けない	−	−	4(6.8)	12(20.3)	43(72.9)
3. 親としての成長	15)子どもによって自分の心が変わり、強くたくましくなった	−	−	3(5.1)	16(27.1)	40(67.8)
	16)子どもを育てることによって自分のあり方を考えさせられる	−	−	4(6.8)	9(15.3)	46(78.0)
	17)子どもを育てていることで、人間的に成長させてもらっていると感じる	−	−	2(3.4)	14(23.7)	43(72.9)
	18)子どもに生きる勇気をもらっている	−	2(3.4)	5(8.5)	20(33.9)	32(54.2)
	19)子どもをもって無償の愛というものを理解できた	1(1.7)	−	6(10.2)	12(20.3)	40(67.8)
	20)言葉ではうまく表現できない心のつながりを子どもとの間に感じたとき愛情を感じる	−	1(1.7)	5(8.5)	15(25.4)	38(64.4)
	21)子を持って初めて自分を産み育ててくれた両親に感謝したい	−	−	6(10.2)	11(18.6)	42(71.2)
4. 子どもに必要とされること	22)子どもをきつく叱った後でもすぐになついてくれるときに安心した気持ちになる	1(1.7)	1(1.7)	5(8.5)	9(15.3)	43(72.9)
	23)日々必要とされ親という実感がわいてきて、子どもに愛情を感じる	−	−	1(1.7)	15(25.4)	43(72.9)
	24)叱った後に、かわいそうなことをしたなと思いその後むしろ愛情を感じる	−	3(5.1)	10(16.9)	15(25.4)	31(52.5)
5. 夫への感謝への念	25)夫が育児に協力してくれることに感謝するとともに安心だ	1(1.7)	1(1.7)	8(13.6)	20(33.9)	29(49.2)
	26)夫が疲れて帰ってきても、今日の子どもの様子を尋ねたり、話に耳を傾けてくれることに感謝している	1(1.7)	5(8.5)	7(11.9)	21(35.6)	25(42.4)
	27)夫や周りの人が協力してくれたときに感謝の気持ちが湧いてくる	1(1.7)	1(1.7)	2(3.4)	14(23.7)	40(69.5)
	28)夫婦が協力して育児している姿を子どもに見せていることに誇りを感じる	2(3.4)	2(3.4)	19(32.2)	14(23.7)	22(37.3)
	29)夫を見て喜ぶ子ども、子どもを見て笑顔になる家族を見て幸せを感じる	1(1.7)	−	1(1.7)	10(16.9)	47(79.7)
6. 新たな人間関係	30)子どもを通して人とのつながりができたときうれしい	−	1(1.7)	5(8.5)	14(23.7)	39(66.1)
	31)子育てをすることによって人との輪が増え、自分の居場所ができた	2(3.4)	3(5.1)	18(30.5)	20(33.9)	16(27.1)
	32)子どもが周囲の人にほめられたりしたときに子どもに誇りを感じる	−	3(5.1)	7(11.9)	17(28.8)	32(54.2)
	33)子どもに関わることで多くの人に助けられていることに感謝するとともに安心する	−	−	1(1.7)	19(32.2)	39(66.1)
7. 子どもからの感謝や癒し	34)子どもに助けられたとき感謝の気持ちになる	−	−	3(5.1)	11(18.6)	45(76.3)
	35)子どもに癒されたときに優しい気持ちになれる	−	−	1(1.7)	6(10.2)	52(88.1)
	36)子どもが優しく命を大切にして育っているということが感じられたとき誇りを感じる	−	−	5(8.5)	9(15.3)	45(76.3)
8. 出産や子育ての意義	37)子どもを産めたことに喜びと誇りを感じる	−	−	2(3.4)	10(16.9)	47(79.7)
	38)自分のお腹を痛めた子を育てられることに喜びや誇りを感じる	−	−	2(3.4)	12(20.3)	45(76.3)
	39)育児は思いどおりにいかないけれど、乗り越えて達成できたときに喜びを感じる	−	1(1.7)	4(6.8)	13(22.0)	41(69.5)

表3　基本属性からみた母親の育児幸福感

			計	育児幸福感		
			n=59	平均点	標準偏差	有意確率[1)]
両親の特性	母親の年齢	20～29歳以下	12(20.3)	186.25	7.25	
		30～34	25(42.4)	178.76	10.10	.081
		35歳以上	22(37.3)	178.18	12.22	
	母親の職業	なし	48(81.4)	179.98	10.93	.896
		あり	11(18.6)	180.45	10.60	
	父親の年齢	29歳以下	10(16.9)	182.70	9.18	
		30～34	19(32.2)	179.11	11.89	.864
		35～39	20(33.9)	179.80	10.88	
		40歳以上	10(16.9)	179.80	11.06	
	父親の職業	正職員	51(86.4)	180.41	10.98	.541
		その他	8(13.6)	177.88	9.75	
子どもの特性	人数	1人	21(35.6)	181.81	9.43	
		2人	23(39.0)	179.35	10.23	.652
		3・4人	15(25.4)	178.73	13.51	
	受診児の出生順位	第1子	25(42.4)	182.40	9.79	
		第2子	19(32.2)	178.05	9.55	.363
		第3・4子	15(25.4)	178.73	13.51	
	性別	男	24(40.7)	180.50	12.87	.801
		女	35(59.3)	179.77	9.27	
家族形態		核家族	57(96.6)	179.72	10.80	.187
		拡大家族	2(3.4)	190.00	2.83	
一番の育児協力者		父親	32(54.2)	182.63	8.88	
		母親側の親	19(32.2)	177.95	12.24	.110
		その他	8(13.6)	174.88	12.50	

1)一元配置分散分析

表4　父親の労働時間・育児参加時間からみた母親の育児幸福感

				計	育児幸福感		
					平均点	標準偏差	有意確率[1)]
父親の労働時間（週）	n=56[2)]		～50時間	20(33.9)	178.90	12.53	
			51～65時間	15(25.4)	183.53	8.24	.191
			66時間～	17(28.8)	176.53	9.02	
父親の帰宅時間	n=56[2)]		～19時	18(30.5)	179.50	10.75	
			20～21時	25(42.4)	179.36	12.22	.771
			22時～	13(22.0)	181.92	8.29	
父親の育児参加時間	n=59	平日	ほとんどなし	15(25.4)	176.60	10.69	
			30分ぐらい	15(25.4)	181.67	11.26	.210
			1～2時間	24(40.7)	182.46	9.28	
			半日・その他	5(8.5)	174.20	14.62	
		休日	1時間未満	6(10.2)	176.50	11.74	
			1～2時間	10(16.9)	179.30	10.86	.508
			半日ぐらい	33(55.9)	179.64	11.27	
			ほぼ一日中	10(16.9)	184.40	8.46	
父親に任せて母親が外出できる時間(週)	n=59		ほとんどなし	32(54.2)	181.66	9.67	
			1～2時間	12(20.3)	173.00	11.35	.036
			半日・一日中	15(25.4)	182.33	10.92	

1)一元配置分散分析　2)不明を除く

側の親177.95点，その他が174.88点であり，有意差はみられなかった．

4）父親の労働時間・育児参加時間からみた母親の育児幸福感（表4）

父親の労働時間（週）では，50時間以下の場合178.90点，51～65時間の場合183.53点，66時間以上の場合176.53点であり，有意な差はみられなかった．

父親の帰宅時間別にみると，19時より前の場合179.50点，20～21時の場合179.36点，22時以降が181.92点であり，帰宅時間が早いと育児幸福感が高いというわけではなかった．

父親の育児参加時間では，平日はほとんどなしの場合176.60点，30分くらいが181.67点，1～2時間が182.46点，半日・その他が174.20点であった．休日は，1時間未満が176.50点，半日ぐらいが179.64

点，ほぼ一日中が184.40点であり，父親の育児参加時間が長いほうが育児幸福感の得点は高かったが，有意差はみられなかった．

父親に任せて母が外出できる時間（週）では，ほとんどなしの場合181.66点，1～2時間の場合173点，半日・一日中が182.33点であり，ほとんどなしと半日以上の場合に母親の育児幸福感が高く，1～2時間の場合に育児幸福感は低く，有意な差がみられた．

Ⅳ．考　察

今回の調査は，直接配布による郵送回収法である．また，本研究結果は，特定の地域で一定期間に実施された健診受診者から得られた59例のデータに基づく限定されたものであるため，この地域の1歳6ヵ月児の母親すべてを代表しているものとはいえない．有効回収率は48.3%と低く，一般化することはできないことを踏まえて以下を考察する．

今回の対象者の育児幸福感の得点は，全体に高得点のものが多かった．特に，第1因子「子どもの成長」や第2因子「希望と生きがい」において高得点であり，清水ら[11]の先行行研究の結果と同様の傾向であった．今回対象とした1歳6ヵ月児の母親は，この時期に特有の言語や知能の発達に触れ日々子どもの成長や存在を実感する機会が多いことが幸福感につながっていると考えられた．

また，育児への協力者としては父親が多かったが，育児幸福感の8因子のうち，分布にばらつきがみられたのは，第5因子「夫への感謝の念」であった．この因子は清水ら[11]の研究においても，他の因子と比べ平均値が低いと報告されている．今回は，中でも，「夫が疲れて帰ってきても，今日の子どもの様子を尋ねたり，話に耳を傾けてくれることに感謝している」という項目においては，他項目と比較して，「あてはまらない」と「あまりあてはまらない」の割合が高かった．回収したアンケート用紙の中には，「夫が疲れて帰ってきても」という箇所に「？」マークが書かれているものもあり，対象者にとっては解釈が難しい項目であった可能性がある．育児幸福感尺度は近年開発されたものであり，今後，研究が積み重ねられることで，より回答しやすい尺度として発展していくことが望まれる．

母親の育児幸福感は，両親の特性，子ども・家族の特性による差はみられなかったが，母親の年齢が29歳以下の場合，子どもの人数が1人・出生順位が第1子の場合に，母親の育児幸福感の平均点が高い傾向がうかがえた．ハヴィガーストの発達理論の中で，発達課題は個人の生涯にめぐりくる様々な時期に生ずるものであり，その課題を立派に成就すれば個人は幸福になり，その後の課題も成功すると述べられている[14]．このことから，29歳以下である母親は，壮年初期の「第1子を家族に加える」「子どもを育てる」という発達課題を達成していることが育児幸福感の高さに影響したと考えられる．育児ストレスに関する先行研究では，母親の就労状況や子ども数などによりストレスの程度が異なる[6)~9)]といわれている．また，乳児期には，母親が子どもに対して肯定的な感情を持っていても育児ストレスが低いとはいえないことが明らかにされている[15]．すなわち，育児ストレスは状況要因に比較的影響を受けやすいが，育児幸福感は，育児の状況的な要因には左右されにくく，母親の特性的な物ごとのとらえ方を反映する可能性が考えられる．育児ストレスが虐待予防のハイリスク者を把握するのに有用な視点であるのに対して，育児幸福感は育児の肯定感を確かめられるポピュレーションアプローチに有用なのではないかと考えられた．

父親の労働時間については，アンケートでは週あたりの時間の記載を求めたが，約10%が無記入であり，回答しにくい項目であったと考えられる．父親の週あたりの労働時間を把握するための適切な方法を検討していくことが必要と考えられる．また，労働時間に対して，意識化されていないことや，サービス残業などが常態化していることや，北海道のように季節によって生活に変化のある地域では，様々な職業において時期的な労働時間の変動があること等も回答しにくかった要因と考えられた．

父親の帰宅時間が遅いほうが母親の育児不安が高いというこれまでの報告[13]などから，今回の研究テーマに関しても，父親の労働時間が短く，帰宅時間が早いほうが，また父親の育児参加時間が長いほうが，母親の育児幸福感は高いであろうと考えていたが，実際には労働時間，帰宅時間，育児参加時間に有意な差はみられなかった．これには，今回の対象者の育児幸福感が全体として高かったこと，育児協力者として父親や実母がソーシャルサポートとして機能していること，育児に関する肯定的な感情を表出する機会や場に参加している母親が多かった可能性などが関係したと考えられる．休日については，父親の育児参加時間が長いほど母親の育児幸福感が高いという傾向がうかがえた．父親の育児参加を妨げる要因の一つとして育児時間の確保の困難性が挙げられており[16]，平日は母親が父親に育児参加を期待できない状況であるが，休日は平日よりも子どもと関わる時間が比較的確保されやすいと考える．このことから，休日には母親は父親の育児参加を期待することが予測され，休日の育児参加時間の長さが母親の育児幸福感に影響したのではないかと考えられる．

母親の育児幸福感との有意な関連がみられた唯一の項目が，父親に任せて母親が1人で外出できる時間であった．外出できる時間が「ほとんどない」「半日以上」の場合に育児幸福感が高く，1～2時間の場合に

低いという正比例でない結果が得られた．母親の育児に関する感情は，父親からのサポートと関連がある[10]といわれており，さらに，中嶋ら[17]は実際のサポート量よりも，母親がサポートを受けているという認知のほうが母親の精神的健康に大きく影響することを明らかにしている．今回の研究においても実際に外出するか否かより外出しようと思ったらできるという認知が，母親が父親に希望を伝えたり，協力・理解し合える良好な夫婦関係や育児幸福感に反映したのではないかと考えられる．また，母親が1人で外出できる時間が「ほとんどない」場合にも母親の育児幸福感が高かった．このことに関して，子どもが母親に依存している1歳という時期においては，共に過ごすことを当然のことと捉え，子どもと離れての外出やそれに伴う不安な状況を望まない母親も存在し，それらの母親は，現在の状況を受け入れていることが育児幸福感に通じていると考えられた．しかし，育児中の母親が望んだ時に子どもと離れて外に出られる自由さや，拘束感から開放されリフレッシュできることが保証されていることは母親の精神的健康に影響すると考えられる．父親などによる家庭内のサポートで母親が外出できる場合だけでなく，家庭内のサポートを頼れない母親にとっても，それぞれの地域において使いやすい一時保育や子育て支援が充実することは，母親の精神面の健康を高めるのではないかと考えられた．

V．謝　辞

本研究にあたり，A市保健センターの保健師の皆様，お母様方，ならびに，アンケートの配布・依頼に携わった学生に，深く感謝いたします．

文　献

1）厚生労働省．21世紀成年者縦断調査2004.
2）総務省．社会生活基本調査2001.
3）総務省．労働力調査2006.
4）門脇豊子，清水嘉与子，森山弘子編．次世代育成支援対策推進法，少子化社会対策推進法．「看護法令要覧平成19年版」，日本看護協会出版会，東京，2006.
5）猪口邦子，勝間和代．「猪口さん，なぜ少子化が問題なのですか？」，ディスカバー携書，東京，2007.
6）清水嘉子，西田公昭：育児ストレス構造の研究，日本看護研究学会誌2000；23（5）：55-66.
7）三国久美．育児ストレス．小児看護2005；28（10）：1401-1405.
8）三国久美：乳幼児をもつ親の育児ストレスに関する縦断的研究，平成11～14年科学研究費補助金研究成果報告書2005，3-64.
9）村上京子，飯野英親，塚原正人，辻野久美子．乳幼児を持つ母親の育児ストレスに関する要因の研究．小児保健研究2005；64（3）：425-431.
10）白川園子，園部真美，斉藤早香枝．育児におけるソーシャルサポートの役割．小児看護2006；29（12）：1700-1705.
11）清水嘉子，関水しのぶ，遠藤俊子，落合富美江．母親の育児幸福感，-尺度の開発と妥当性の検討．日本看護科学会誌　2007；271（2）：15-24.
12）坂梨京子，寺岡祥子，千場直美，坂本由紀子，田島朝信．父親帰宅時間と家事・育児役割との関係．熊本大学医療技術短期大学紀要2002；12：53-60.
13）安東智子，岩藤裕美，荒牧美佐子，無藤隆．幼稚園児をもつ夫の帰宅時間と妻の育児不安の検討．小児保健研究2006；65（8）：771-779.
14）舟島なをみ．看護のための人間発達学，第3版，医学書院，東京，2007年，pp 47-48.
15）高橋有里．乳児の母親の育児ストレス状況とその関連要因．岩手県立大学看護学部紀要2007；9：31-41.
16）柳原眞知子．父親の育児参加の実態．天使大学紀要　2007；7：47-56.
17）中嶋和夫，桑田寛子，林仁美，岡田節子，他．父親の育児サポートに関する母親の認知．厚生の指標2000；47（15）：11-18.

受付：2008年11月30日
受理：2009年2月13日

The Correlations Between Child Care Happiness of Mothers Whose Children was 1 year and 6 months old and Fathers' Working and Child Care Hours.

Azusa SAWADA[1], Seiko AKENO[2], Yuuka YOSHIMORI[3], Yoshiko KUDO[2]

1) Health Promotion Division, Obihiro City.
2) School of Nursing and Social Services, Health Sciences University of Hokkaido.
3) Graduate School of Nursing and Social Services, Health Sciences University of Hokkaido.

The present study was conducted in order to clarify correlations between child care happiness of mothers whose children was 1 year and 6 months old and fathers' working and child care hours. Questionnaires were handed to 122 mothers who came to health check at the health center of A city. Analysis was performed on valid responses obtained from 59 individuals. From the analysis of correlations between child care happiness of mothers and fathers' working and child care hours, the following results were obtained. Forty two percent of fathers return to home at 20 ～ 21 o'clock. Mean of working hours of fathers were 59.2±15.0. Forty percent of fathers spend on 1～2 hours for child care on weekday, and 55.9% spend with children on half of day on weekend. There were no correlations between characteristic of parents, working and child care hours of fathers and child care happiness of mothers. Child care happiness of Mothers who could not go out and who could go out among half of day were higher than who could go out about 1～2 hours.

Key words：Child care happiness, Fathers, Working hours, Child care